

# トリノ・オリンピック報道 における外国関連情報と中立性

「ニュース10」「ニュース23」「報道ステーション」の場合

横山 滋



## ▶ 1 問題と背景

この稿は、夜10時台以降の代表的なテレビニュース番組に放送されたトリノ・オリンピック関連ニュースが

- 1) どのような外国イメージに関する情報を、どのくらい含んでいたか、また、
  - 2) 全体として何について、どのようなメッセージを伝えたか
- を検証し、テレビ・スポーツニュースの意味を考えようとするものである。

### 1) オリンピック関連ニュースが伝える外国イメージ

何をもち「外国関連ニュース」とするかについては、さまざまな定義が可能であるが、オリンピックについてのニュースは、その素材が各国の選手が競い合う国際競技であるという点で、少なくとも「外国関連ニュース」の枠内に存在している。ただし、その主たる関心は国際競技の経過ならびに結果 それも日本選手の にあることは明らかであって、直接に外国イメージについての何かを知ろうとするものではないことも、改めて言うまでもない。では、なぜ、トリノ・オリンピックについてのテレビニュースで外国イメージに関する情報を調べようとするのか。

ここでは第1に、テレビニュースのオリンピック報道が外国についてのどのような情報を伝えているかを取扱う。私たちが日常的に摂取している情報には、自分でそれを求めてゆく場合と、新聞を読む場合にせよテレビニュースを見る場合にせよ、他の何かを読んだり見たりしている一連の流れの中で、図らずも読んだり見たりしてしまうというケースが少なくない<sup>(1)</sup>。インターネットによる動画伝送が普及によって、情報伝達の性格について「プッシュ型」と「プル型」という区別が用いられている<sup>(2)</sup>が、自分が選んで情報を取ってこなければならない通常のインターネット・ニュースの場合とは違って、テレビは先方が送ってくるものを受け取る「プッシュ型」に分類される。リモコンが普及して以来、ザッ

脚注

1. この点について、ドミニク・ウォルトンは、テレビには「視聴者をふつうなら出会うはずのない映像に出合わせる」(la rencontre improbable de ces images et de ce public<sup>1</sup>)という機能があることを指摘している。Dominique Wolton, *Eloge du*

*grand public-Une théorie critique de la télévision*, Flammarion, 1990, p. 77

2. 「シンポジウム デジタル放送が築く新世紀」、『放送研究と調査』2001年1月号, 11ページ

ピングによってその瞬間瞬間に自分で見たいものだけを選ぶ可能性がないではないが、テレビは本質的には「プッシュ型」であろう。したがって、ここでの第1の関心は、このような「プッシュ型」のメディアであるテレビのニュースが、オリンピック報道の中でどれだけの外国関連情報を伝えているかということの、量的・質的な検証にある。

## 2) オリンピック関連ニュースの発しているメッセージとは何か

第2に、オリンピック報道がどのようなスタンスで何を伝えているかという点を、主として質的に分析する。日本のテレビにおけるスポーツは、主として中継番組とニュースで扱われているが、ニュースはさらに「スポーツ・ニュース番組」と通常の「ニュース番組」に分けられる。すなわち、フジテレビ深夜の「すぽると」や、日曜日のNHK「サンデースポーツ」のように、独立の番組としてスポーツ・ニュースだけを扱うのが前者で、後者では政治や経済、社会などの一般ニュースと同一の番組内で扱われる。ただし通常は番組の後半に近い位置に、スポーツ・ニュースのコーナーとして設けられている。扱いの自由度としては、中継番組>スポーツ・ニュース番組>一般ニュース番組の順に自由度が少なくなり、中継番組ではパレーボールの試合前のように、アイドル・グループの歌や踊りのパフォーマンスを入れることもできるが、ニュース番組の枠内ではそのようなことは許されない。しかし、他方では、ニュースもドラマやバラエティ番組などと視聴率を争わねばならない状況に置かれているし、そのような娯楽番組のテンポや雰囲気は馴れ親しんでいる視聴者の趣味に対応しなければならない。そのような諸条件の中で“キラー・コンテンツ”の1つと言われているオリンピック関連のニュースが、何について、どう伝えているのかを明らかにしてみたい。

周知のように、一般ニュースを含む放送番組の編集等に関しては、放送法によって、次のように定められている。

**第三条の二** 放送事業者は、国内放送の放送番組の編集に当たっては、次の各号の定めるところによらなければならない。

- 一 公安及び善良な風俗を害しないこと。
- 二 政治的に公平であること。
- 三 報道は事実をまげないですること。
- 四 意見が対立している問題については、できるだけ多くの角度から論点を明らかにすること。

このように規定されたニュースの「内容」と「伝え方」の中に、どのような「意見」や「主張」の表明が見られるかについては、「村山新首相誕生はいかに伝えられたか～テレビ・ニュースにおける主観的表現と意見についての一考察～<sup>(3)</sup>」と「テレビ・ニュース比較研究の試み(その2) “自衛隊合憲” 答弁を中心に<sup>(4)</sup>」で試みたことがある。今回は、スポーツニュース、それもオリンピックという場に限定して、どのような主観的要素が含まれているかに注目した。

3. 『放送研究と調査』, 1994年12月号, 52-57ページ

4. 『放送研究と調査』, 1995年8月号, 44-57ページ

## ▶ 2 方法と素材の範囲

### 1) 方法

2006年2月1日から28日の間に録画された「NHKニュース10」(以下、「ニュース10」と略称)、TBSの「筑紫哲也ニュース23」(以下、「ニュース23」と略称)およびテレビ朝日の「報道ステーション<sup>5)</sup>」の映像およびその構成表を素材として分析を行った。

データは、慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所の『外国関連報道が構築する世界像』プロジェクトが作成した構成表を用いた。これは「特集に寄せて」に記載されているとおり、同プロジェクトが録画し、それをもとに、

- i. 放送日
- ii. ニュース項目名
- iii. 開始・終了時刻
- iv. 番組内での項目番号
- v. 項目内容(テロップの見出し、リードなどによる概略)
- vi. サウンドバイトの使用と登場人物
- vii. (外国関連のニュースについては)、関係のある国や地名

などを書き起こし、通常、放送局内部で放送に際して用いられている構成表の形式で番組内容を網羅的かつかなり詳細に文字化したものである。

### 2) トリノ・オリンピックおよび関連報道の概要

#### 大会日程と放送との時差

トリノ・オリンピックは、現地時間の2006年2月10日(金)から26日(日)までの期間にわたって行われた。

日本での放送は時差の関係で、下記のように、開会式も競技も分析対象となった番組の放送終了後に開始される形になっていた<sup>6)</sup>ため、分析対象となった3番組のニュースは、すべて日付上1日遅れで放送されている。そのため日本では、朝や昼、それに夕方の時間帯のニュースで放送され、夜のニュースでは扱われなかった種目も少なくない。また、土曜日と日曜日には当該番組の放送がなかったので、上記の3番組が大会期間をカバーした放送日は合計11日であった。

現地(トリノ)での日程	日本での放送日(3番組のみ)
i. 開始前の期間(1月31日~2月9日).....	2月1日~10日
ii. 大会期間中(2月10日~26日).....	2月13日~27日
iii. 終了後(2月27日~28日).....	2月28日

#### 脚注

5. なお、テレビ朝日の番組名は、番組中に使用されているパネルや同社のウェブ・サイトによると「報道STATION」となっているが、一般的には「報道ステーション」という表記が行われているので、ここではカタカナ表記の方を用いることにした。

6. 唯一の例外は2月13日の「NHKニュース10」で、この時だけ番組枠を拡大して「ニュース10」の中で生中継を行っている。詳しくは後述。

**主な話題となった競技の日程（日本時間）**

参考までに、目立った出来事を紹介しておく、次の通りである。

- 2月10日(金) 開会式
- 13日(月) 女子ハーフパイプ決勝
- 14日(火) スピードスケート男子500m
- 15日(水) スピードスケート女子500m
- 22日(水) 女子フィギュアスケート(ショートプログラム)
- 24日(金) 女子フィギュアスケート(フリー)
- 26日(日) 閉会式

なお、結果は、「過去最高」の37個のメダルを獲得したアテネ・オリンピックとは対照的に、期待された種目でことごとく3位以内に入れず、メダルは荒川静香(フィギュア・スケート)の金メダル1個だけに終わった。

表1

	NHK	TBS	テレビ朝日	合計
	ニュース10	NEWS23	報道STATION	
2月1日(水)	1:50	1:30	2:54	6:14
2月2日(木)	2:07	0:21	0:00	2:28
2月3日(金)	5:51	0:20	1:21	7:32
2月4日(土)	0:00	0:00	0:00	0:00:00
2月5日(日)	0:00	0:00	0:00	0:00:00
2月6日(月)	4:27	7:30	4:22	16:19
2月7日(火)	4:49	11:12	0:00	16:01
2月8日(水)	15:07	8:29	11:33	35:09
2月9日(木)	13:41	8:35	7:22	29:38
2月10日(金)	17:59	6:10	13:51	38:00
2月11日(土)	0:00	0:00	0:00	0:00:00
2月12日(日)	0:00	0:00	0:00	0:00:00
2月13日(月)	1:20:29	12:44	10:25	1:43:38
2月14日(火)	25:07	7:36	10:13	42:56
2月15日(水)	30:35	8:22	6:20	45:17
2月16日(木)	27:30	15:42	5:35	48:47
2月17日(金)	22:28	6:56	3:21	32:45
2月18日(土)	0:00	0:00	0:00	0:00:00
2月19日(日)	0:00	0:00	0:00	0:00:00
2月20日(月)	22:09	10:33	6:47	39:29
2月21日(火)	24:24	7:34	13:28	45:26
2月22日(水)	15:20	8:08	11:12	34:40
2月23日(木)	21:01	6:59	10:34	38:34
2月24日(金)	30:26	10:07	22:26	1:02:59
2月25日(土)	0:00	0:00	0:00	0:00:00
2月26日(日)	0:00	0:00	0:00	0:00:00
2月27日(月)	15:36	16:16	16:49	48:41
2月28日(火)	3:21	3:29	10:07	16:57
合計	6:24:17	2:38:33	2:48:40	11:51:30

■ 大会期間中であることを示す

□ 土・日で放送枠がないことを示す

図1 トリノ・オリンピック関連ニュース時間の推移（分）

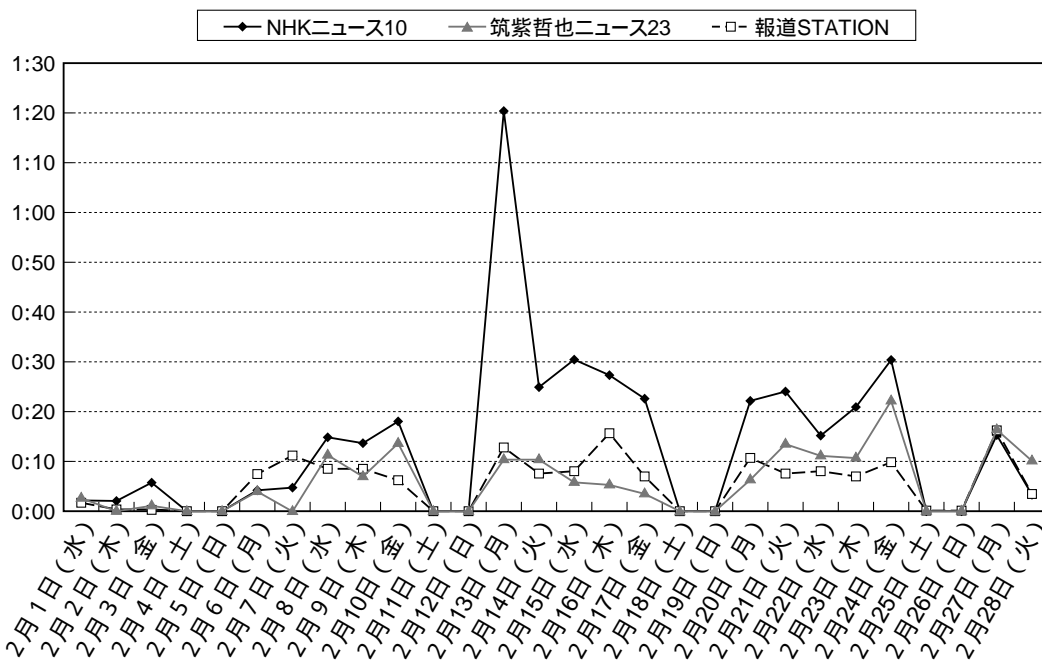


表2 オリンピック関連放送時間

	NHK ニュース10	TBS NEWS23	テレビ朝日 報道ステーション	全体
開始前	1:05:51	44:07	41:23	2:31:21
期間中	5:15:05	1:50:57	1:57:10	9:03:12
終了後	03:21	03:29	10:07	0:16:57
全体	6:24:17	2:38:33	2:48:40	11:51:30
(13日中継) 補正後	1:09:57 4:05:08			



### オリンピック関連のニュース量

2月1日から28日までの番組で扱われたトリノ・オリンピック関連のニュース時間量は、表1および図1のようになっている。

#### i. 「ニュース」の枠内で行われた生中継

最も目立つのは13日の「NHKニュース10」の放送時間量が飛び抜けて長いことであるが、これは日本選手3人が出場するスノーボード女子ハーフパイプ決勝が日本時間の午後10:00から行われ、NHKは「ニュース10」の中で（ニュースとして）その中継を行うという方針を採ったためである。その結果、この日は午後9時45分から「ニュース10」が開始され、通常1時間の放送枠だった「ニュース10」が1時間35分に延長されている。

#### ii. 差を付けたNHKのオリンピック報道時間量

オリンピック「開始前」と「期間中」、「終了後」に分けて集計したものが、表2である。

なお、上述のように2月13日の生中継部分が1時間09分57秒にわたっているため、参考までにこれを除くと、「期間中」の「ニュース10」のオリンピック関連報道時間量は、

4時間05分08秒となるが、それでも「ニュース23」および「報道ステーション」の2倍を超えている。

また、「期間中」の1日当たりのオリンピック報道時間は、

	NHK	TBS	テレビ朝日
平均	28分39秒	10分05秒	10分39秒
標準偏差	17分55秒	03分26秒	05分17秒

で、ここでも例外的な編成が行われた13日を除いて計算し直すと、NHKの「期間中」の平均報道時間が23分28秒、標準偏差が05分20秒となる。

いずれにしても、これらのことはNHKがトリノ・オリンピックの報道に非常に力を入れていたことを示している。

### ▶ 3 結 果

#### 1) オリンピックのニュースに含まれていた外国イメージ関連情報

まず、トリノ・オリンピック関連のニュースがどれだけの外国イメージに関連する情報を伝えたかという点から見てゆくことにしたい。

結論から言えば、オリンピック報道は自国の有力選手の試合前の状況や戦績をめぐって行われ、それ以外の情報は極めて少なかった。

オリンピックの出場する選手の動向や、前景気をおおるような小特集はすでに1月の段階でも見られるけれども、通常の大大会前報道が始まるのは1週間前からで、今回の例でいえば、2月6日(月)からである。各番組ともロケーション・アンカーとしてスポーツ担当キャスターを派遣していて、「ニュース23」の久保田智子は2月6日からトリノで画面に登場し、メインメディアセンター前からの中継を行っている。「ニュース10」の青山祐子は「開幕まであと3日」となった8日(水)に、また「報道ステーション」の武内絵美は2月9日(木)に、トリノからのレポートを開始している。2月1日～3日と6日～10日のオリンピック関連の報道時間量には下の表に見られるような大きな差があるから、どの番組もほぼ1週間前から事前報道の体制を立ち上げていると見てよい。

	ニュース10	ニュース23	報道ステーション
2月1日～3日	3分16秒	44秒	1分25秒
6日～10日	11分13秒	8分23秒	7分26秒

この時期は当然まだ競技が始まっていないから、主たる関心事は有力選手たちの動向ということになる。どの選手がいつトリノ入りしたか、初めて本番と同じ会場で練習を行った時の調子がどうであったか、などが報じられているが、一言でいうなら、選手と彼らを包むカプセルのような小宇宙がスッポリと切り取られている感じで、外界としてのトリノやイタリア、国際社会などとのつながりを示すようなものは、映像でもコメントでもほとんど出て来ない。

その中で例外的なのは、2月3日(金)「ニュース10」における伊藤綱太郎のトリノからの「トリノ五輪警備は万全か」というレポートである。これは、イタリア軍山岳部隊が競技会場周辺のパトロールをしている様子などを紹介し、イタリアがイラクに派兵していてテロの標的となる可能性が高いので軍も警備を支援していること、イタリア政府がオリンピックの治安対策費として130億円を投じ、期間中軍や警察など1万5,000人を動員して警備、さらに空港および主要駅を600台のカメラで24時間監視していること、など

に言及している。

これ以外にオリンピックに直接関係のない情報といえば、2月20日の「報道ステーション」が、中島みゆきの歌が好きだという「日本オタク」のタクシー運転手を紹介して日本文化の伝播状況を示唆したほかは、2月27日(月)の「ニュース23」が「女子フィギュア金メダリストの荒川静香に、トリノ市のあるピエモンテ州から、王冠をデザインした髪飾りティアラが贈呈された」というニュースを伝えている程度で、あとはトリノ名物のカプチーノ風飲みもの、ピチェリンの話題(2月6日(月)久保田、8日(水)青山)というような、トリノに関する観光ガイド的な情報であった。

期間中のオリンピック報道はメダルへの期待と競技結果一色になってゆくので、これら3つのニュース番組におけるスポーツ・ニュースは、事前・事後の報道も含めて、みごとにメダル関連報道に集中していると言ってよい。

## 2) オリンピックのニュースは何を伝えたか

さて、オリンピック関連のニュースは、時期によって「開始前」、「競技期間中」および「終了後」という3つの内容に分類される<sup>7)</sup>。

### 開始前

競技が始まるまでのニュースは、日本の有力選手のメダル獲得の期待をめぐって行われた。この種のニュースは、トリノへの出発、トリノ到着などの際の空港でのインタビューや、リンクやコースで初滑りを行った様子、選手自身へのインタビュー、専門家の見たメダルの可能性などで構成されている。これに関連して、地元の新聞やテレビなどが日本選手をどう扱っているかということも素材になる。

それ以外のニュースとしては、内外の選手のヒューマン・インタレスト・ストーリーなどがある。

### 期間中

競技が始まったのちは、まずその結果を中心に報道が行われる(短距離のスピード・スケートやフィギュア・スケートのように、競技が2日間以上にわたって行われる場合には、「(前半)終了後でありながらまだ(後半)開始前」という状況が生まれる。この時期にはすでに終了した競技前半の結果も使えるし、来るべき競技後半の闘いに向けた準備状況も素材とすることができ、事実、そのような報道が多数行われている)。完了した競技については、なぜそのような結果になったのかという分析が1つの要素であるが、トリノ・オリンピックの場合、前述のように獲得できたメダルはフィギュア・スケート女子の荒川静香選手の金メダル1つだけであったから、必然的結果として、事前にあれほど期待されていたのになぜメダルが取れなかったのかという点に関する裏話が多く取り上げられた。

ここでもヒューマン・インタレスト・ストーリーが彩りを添えていて、かえってそれらの中に競技以外の外国イメージに関連する情報が盛られている。例えば、次のような例がある。

#### i. 越選手にあこがれて”南国からトリノへ(「ニュース10」2月17日(金))

脚注

7. ただし、競技によって行われた時期が異なっているので、ここでいうそれぞれの競技種目の時期区分は、冒頭に述べた大会全

体の「開始前」「競技期間中」および「終了後」とは一致しない。

- バミューダ諸島代表のパトリック・シングルトン選手と日本の越選手の知られざる“師弟関係”に関する話題
- ii. フリースタイル男子モーグル 2人の母にささげるメダル(「ニュース10」2月17日(金))  
韓国で生みの親に置き去りにされ、3歳の時養母デボラ・ドーンソンさんに引き取られてアメリカで育った男の子が12歳でモーグルを始め、20歳のときW杯5位入賞、トリノで銅メダルを獲得。「生みの親が見ていたら名乗り出てほしい」(男子モーグルのドーンソン選手)
  - iii. 個人種目における初の黒人金メダリスト(「ニュース10」2月20日(月))  
アメリカのシャニー・デービス選手が黒人選手に対する差別を乗り越えて代表としての出場権を獲得し、スピードスケート男子1,000mで1位となるまでの話
  - iv. アルペン初出場中国チームの挑戦 中国アルペン支えた“日本”(「ニュース10」2月23日(木))  
中国ナショナル・チームの長野合宿、資金面では中国のスキー市場に関心を持つ日本のスキー・メーカーが支援。

しかし、ニュースで扱われるオリンピック関連の項目は、ほとんどすべてが日本選手の成績に関するものであるから、これらのようなケースは全体としては稀であった。また、扱っていたのは、ほとんどNHKの「ニュース10」だけであった。

### 終了後

競技中の心理や結果、今後への抱負などについての選手自身に対するインタビューが中心的な素材で、そのほかには帰国時期に関する情報や終了後の競技日程などに関する情報があり、帰国後の記者会見なども報道されている。番組への生出演やビデオ出演というケースもあるが、今回はフィギュア・スケート女子の荒川静香選手一人で、そのコーナーのインサート用に関係者の反応や談話などが用いられた。

### 関心の焦点は常に「メダル」

これら、2月ひと月分の合計で12時間に近いトリノ・オリンピックを報ずるテレビニュースの特徴は、ほとんどどこでも一様に「メダル」に関心が集中していることである。それは、記者のリポートやナレーション、キャスター・トークなど、あらゆる場面に共通している。次に、それらが「どう伝えられたか」ということと合せて、いくつかの事例を見てゆくことにしよう。

### 3) オリンピックのニュースはどう伝えたか

「何を伝えたか」ということと並んで、あるいは、それ以上に重要なのは「どう伝えたか」ということである。「どう伝えたか」ということは、さらに、「どのような調子で伝えたか」ということと、「どのような方向性をもって伝えられたか」という2つに分かれる。

### 調子・雰囲気

周知のように、ニュース番組における音声表現には、

- A. キャスターによるトーク(原稿なし)
- B. キャスターによる読み(原稿あり)
- C. キャスター以外のナレーターによる読み(原稿あり)



- D. 記者・リポーターなどによるレポート（手持ちの原稿・メモなどがある）
- E. 取材相手によるサウンドバイト（放送用に短く編集された談話ビデオ映像）
- F. 生出演のゲストなどとのインタビュー

などがある。いずれの場合も、限られた時間内に放送を終了しなければならないという制約があるため、事前にかなり中身を詰めておく（＝相当程度まで話題や扱う方向などを決めておく）ことが多い。話の成り行きに合わせて、当意即妙のアドリブを入れるというようなことは、よほどの力量があるか、それなりの編集権限のようなものを与えられていなければ不可能なことである。したがって、ニュースにおける音声表現の大部分は、それなりに事前に考えられた線に沿って進行する。

### i. 読み原稿の場合

さて、その上で、「読み」の部分を見てみよう。これには、キャスターが読む場合と、画面には姿を見せない影のナレーターによって読まれる場合とがあるが、いずれの場合も、編集責任者の同意が前提となっている。

まずこの部分に、「メダル」という言葉が頻出する。この部分は、草創期のラジオ・ニュースおよびテレビニュースの手本となった新聞の記事の書き方と同様、通常は客観性が求められ、事実と意見の書き分けが前提とされる。そこで、基本的には、事実をなぞりながら「メダル」に触れることになる。

例えば、2月6日(月)「ニュース10」は次のようにいう。

**男声ナレーション**「スピードスケートの加藤条治選手、男子500メートルで金メダルの期待がかかっています」

この日、加藤選手はトリノで21歳の誕生日を迎えた。取材陣がそれを祝って、パースデー・ケーキをプレゼントし、同選手はカメラの前でろうそくを吹き消すというパフォーマンスを行っている。上記のコメントはその紹介時のナレーションである。日本の視聴者の多く、どれだけ多くであるかは誰も知らないはずだが、彼に金メダルを期待しているという事実もしくは「空気」を前提としたコメントになっている。

同じ日、「ニュース23」は「日本選手の最新情報」をで何人かの選手の近況を伝えているが、その中のナレーションは次のようなものである。

**男声ナレーション**: スピードスケートの加藤条治は2月6日が21歳の誕生日。最高のプレゼントとしてねらうはもちろん金メダルです。

冬季オリンピック日本人初となる兄妹(きょうだい)でのメダル獲得を狙う成田童夢と今井メロ。ハーフパイプの会場を見学し、より一層気持を高めていました。……

こういうコメントが付けられるということは、選手本人が自分で「(金)メダルをねらう」というようなことを言明していなければならないはずであるから、選手たちも、オリンピックに至るまでのどこかの段階でそう言っているものと推測される。

### ii. 「読み」の前後に位置しているもの

文字で表現するのはなかなか難しいのだが、番組のトーンというものがある。コメントの付け方もそうであるが、読み方にも表情がある。「ニュース10」と「ニュース23」の場合は比較的抑制の利いた語り口を守っているが、「報道ステーション」の場合には、少々「ノリ」がある。

2月20日(月)の「報道ステーション」では、フィギュア・スケート女子の競技開始を目前に控えて、トリノのテレビ朝日スタジオから武内絵美と松岡修造が現地の新聞情報などを伝え、そのあとで「日本選手の最新映像」を流している。まずそのコメントを見てみると、

#### 男声ナレーション

「先ほどおわったばかり。安藤美姫選手の最新映像が入ってきました。注目される4回転ジャンプは成功せず、悔しそうな表情をのぞかせます。しかし、そのほかのジャンプは難なくこなし、調子はまずまずです。

……

(BGM = 元気のいい感じのオーケストラ曲) さらにショートプログラムの滑走順も決定! 日本勢1番手は安藤で14番目。そして荒川は21番目、村主は27番目となりました。

……さあ、注目の女子フィギュアスケート、本番はいよいよ明日!

という具合で、全体としては、映画の予告編のようなクリップになっている。

この「日本選手の最新映像」へは、次のような導入がなされた。CMの終了後、スタジオ全景(4人のショット)から久保田直子と古舘伊知朗の2ショットにズーム・インして、オリンピックのコーナーが始まる。テーマ・ソングがかなり大きな音量でバックに流れ、にぎやかな感じであるし、久保田キャスターのトークも大きな声でジェスチャーを交え、まだ「メダル」の取れない今期オリンピックの後半へ向けて期待や気分を盛り上げようとする印象がある。この雰囲気は延長線上で、先ほどのトリノのスタジオ部分(武内・松岡の2ショット)があり、さらにそのトリノの武内のリードで、ビデオ・クリップが始まっている。

このような流れの中におかれた場合、NHKのような坦々としたナレーションでは演出上の違和感が生じる。そこから、かなり表情を付けた読み方が要請されるし、そのような読み方であったコメントが必要となってくる。つまり、「報道ステーション」のキャスターならびに影のナレーションのコメント内容も、キャスター間のスタジオ・トークや「読み」の調子も、こうした演出の必要性と深く関わっている。

#### iii. 「読み」の調子とスタジオ・トーク

3つの番組の中では「ニュース10」で最も顕著なことだが、一般ニュースとスポーツ・ニュースとでスタジオの雰囲気が一変する。うまい比喻ではないが、「フォーマル」から「カジュアル」になると言っているいかも知れない<sup>8)</sup>。「フォーマル」とか「カジュアル」とかというのは、私的感想や感情表現についての抑制のあるなしという意味であるが、「ニュース23」と「報道ステーション」は、もともと一般ニュースの部分に関しても或る種の「カジュアルさ」を基調としているので、NHKの場合と比べるとスポーツニュースとの落差がそれほど強く印象づけられない。

「ニュース10」のキャスターの1人は有働アナウンサーであるが、彼女の表情や口調はスポーツ・コーナーになるとにわかになら「番組的」になる。一般ニュースを読んでいる時にはそのような表情を見せることはないので、NHKの演出方針として、スポーツでは私的感情や体験など(の一部)を表出することを、むしろ、彼女に求めているように見える。同様の变化は、スポーツニュースではサブに回っている今井環キャスターにも見

#### 脚注

8. 前掲の「村山新首相誕生はいかに伝えられたか」(『放送研究と調査』、平成6年12月号)で、当時の川端義明キャスター

(「NHKニュース」)を「フォーマル」、久米宏キャスター(「ニュースステーション」)を「カジュアル」と評したことがある。

られるし、トリノから伝えている青山祐子アナウンサーにも彼らと同じ或る種の「カジュアルさ」がある。その結果、例えば、次のような掛け合いが行われる。

今井： トリノ・オリンピックも大会11日目、後半に入って、有働さん、メダルがちょっと、なかなか遠いんですけどねえ、あの、カーリングというのは楽しめますね。

有働： われわれも見ていて「行くな！行くな！」とか、「止まれ！」「止まれ！」って

今井： 夢中になりますよね。応援しながら見てたんですけど。途中ちょっとヒヤヒヤしましたけど日本代表、がんばりましたね。

(フィギュア・スケート女子3選手のインタビューを受けて)

有働： なんか3選手のお話聞いてたら、期待もてますねえ。

今井： そうですねえ。何とかこの3人でメダルをというふうにも思うんですが、これを言うと3人にプレッシャーになるんでしょうけどねえ。どうしても期待してしまいますね。

有働： それでも3人は実力ありますから、ほんとに荒川選手言ってたように、力さえ出せば、結果、メダルはついてきますからねえ。ねえ、青山さん。

青山： は~い。もう、ほんとにね、自分の力を最大限に出し切っていただければと思います。(2月20日(月))

#### 方向性 「応援者」としての位置づけ

上記の「ニュース10」のキャスターたちの場合もそうであるが、一般ニュースの時のフォーマルからカジュアルに転じたとともに、キャスターたちは、ごく自然に日本選手の応援団になる。その心理に言及しているのは、TBSトリノ・オリンピック放送のメインキャスター、中居正広である。中居は2月7日(火)の「ニュース23」に出演して、次のように語っている。

筑紫： どうも。アテネ・オリンピックについて二度目ですよ。

中居： そうですね、ぼく、アテネ・オリンピックやらさしてもらって、もう、最高のお仕事でした。

筑紫： で、今度ももうすぐいく。

中居： なんかやらなければいけないこと、伝えなければいけないことを、正直、忘れてしまっていて、自分の感情だけでやらさしていただいた、お仕事の一つだったので、今回も、最高のお仕事をやらさしていただきます。

筑紫： 現場に行くと興奮しちゃうんですよ、思わずね。

中居： 興奮してしまいます。ダメですね、抑えられないですね。なんか、中立の立場でいろいろコメントしなければいけないっていうふうには、言われてたんですけども、どうしてもやっぱり、こう、完全に日本びいきで、……

中居の場合は報道については素人であるし、ニュースではなく中継番組のキャスターであるから多少事情が違ふと思われるが、夜の1時間以上の時間枠を持つ各局の代表的なニュース番組のキャスターたちが、そろって「日本びいき」ないしは「日本勢」の応援団として語っているということは、これらの番組の大前提として、自分たちだけがそうなのではなくて、視聴者にもそのことは了解が得られているという認識があるように見受けられる。むろん、それはキャスターたちだけがそう思っているのではなく、ニユ

一番組の制作責任者たちもそう考えているということを意味している。

#### ▶ 4 考 察

以上のような結果をもとに、冒頭に設定した2つの問題、すなわち、

1) どのような外国イメージに関する情報を、どのくらい含んでいたか、また、

2) 全体として何について、どのようなメッセージを伝えたか

という問題について考察を加えておきたい。

オリンピック報道は外国イメージを伝えられるか

第1の問題について、「NHKニュース10」、TBS「筑紫哲也ニュース23」およびテレビ朝日「報道ステーション」は、

競技に直接関係する内容以外のことをほとんど伝えていない

とりわけ、商業放送であるTBSとテレビ朝日のイブニング・ニュースでは、報道の焦点が完全に競技とりわけメダルの獲得に絞られている。

したがって、現在の状況では、少なくともこれらのニュースに関する限りでは、オリンピック報道は外国イメージについては、ほとんど何も伝えていない。

そこで、オリンピック報道は外国イメージを伝えられるか、というふうに問題を設定しなおしてみると、オリンピックの開催をめぐる大状況の報道や、ヒューマン・インタレスト・ストーリーとして、外国イメージを伝えたケースは僅かながら存在している。しかし、そのような内容を伝えたのは、NHK「ニュース10」だけであった。

このことは、一つにはNHKのオリンピック関連報道の量が他の2番組の2倍以上に達していることと関係があるが、そのことも含めて、放送局の事業理念ならびに経営基盤との関係が考えられる。結果の中で見たように、今回のトリノ・オリンピック報道の中でも、オリンピックを取り巻く国際情勢や経済的・社会的文脈に触れているものがいくつかある。それらの大部分が「NHKニュース10」によるものであることに注目しておきたい。現にこういったリポートが行われている以上、オリンピック競技の経過や結果に興味を持つ人々に対してこの機会にさまざまな外国関連情報を伝えることはできるはずであるが、実際にはいくつかの障壁がある。その一つはマン・パワーと経費という問題であり、もう一つは視聴率の縛りという問題であろう。国際映像で知ることができる競技結果以外の話を取材して放送するためには、それなりのマン・パワー 手間だけでなく着眼も含む が必要である。また、それなりの取材クルーを派遣するとなれば、費用もかさむ。他方、視聴者の関心はメダルの獲得が有望な特定種目に集中するため、その関連の情報を中心に報道せざるを得ない状況にある。しかし、それだけでなく、テレビの報道それ自体が事前報道の段階からメダルへの期待をあおることによって、メディアと視聴者との間で相互作用的に、過熱的メダル報道に陥っているように思われる。その意味で、今のところ、財源を異にする放送機関の存在は、情報の多様性を保つ上で若干の機能を果たし続けていると言ってよいように思われる。

ただし2月3日(金)「ニュース10」の「トリノ五輪警備は万全か」という伊藤綱太郎のトリノからリポートに対してもスタジオの有働キャスターは「伊藤さん、やはり、あの、厳重な警備の中のオリンピックになってはしまいますが、日本選手にはぜひ力を発揮してほしいですねえ」と受けて、関心の焦点を日本選手の活躍という方向に引き戻している。そのために、内容的に外国イメージに関連する情報が提示されているにもかかわらず、それが外国イメージそのものに関心を向かわせる形にはなっていないとは言えない。

スポーツ・ニュースにおける事実の報道と感情の表出

もう一つの問題は、オリンピック関連のテレビニュースが何を、どのように伝えているのか、という問題であった。

#### “メダル報道”としてのオリンピック・ニュース

トリノ・オリンピックについて、3つのテレビニュース番組が行ったのは、大部分、メダルのゆくえに関する情報  
 主要(=メダル有望)競技の経過ならびに結果に関する報道  
 メダル獲得の成功と失敗に関する選手談話などの報道

であった。「相撲の歴史は、幕下で廃業した力士たちの歴史ではなく、横綱や大関など有力な力士たちの歴史である」という言い方が真実であるなら、「オリンピック報道はメダル報道である」という現実、あながち不適切なものとは言えない。ただ、ピエール・ブルデューは、オリンピック放送について「テレビ放送では各国ごとにそれぞれ別のものが選択されている。オリンピック全体を見るものは誰一人いないため、自分が見ているものが全体ではないということに誰一人として気づいていない<sup>9)</sup>」と述べているが、他国の選手だけでなく、メダル以外の情報を視聴者に隠しているという結果になっている。

#### “応援”としてのオリンピック報道

他方、伝達の形式ならびにメッセージという側面に注目してみると、ここで扱った3つの代表的イブニング・ニュース番組は共通して、日本の有力選手がメダルを取ることを期待し、キャスターたちが「個人」としてハラハラ・ドキドキしながら日本選手を応援するという姿勢に終始した。オリンピック関連ニュースの報道量と報道内容についてはNHKの「ニュース10」と、TBS「ニュース23」およびテレビ朝日「報道ステーション」との間に違いが見られたが、キャスターの応援者としての姿勢に関しては違いが見られない。一般ニュースについてはともかく、これらの番組のスポーツニュース・コーナーに関する限り、キャスターのコメントに「中立」はない。近年、テレビニュースの“ソフト化傾向”が指摘されているが、これもその一種といってよいであろう。

このことは、幾重にも当然のことであるのかも知れない。元来、スポーツ・ニュースとは競技の経過・結果を報ずるものであるし、オリンピックに際して自国の選手を応援するのはまことに自然なことである。「目くじらを立てる問題ではない」という見方があるだけでなく、「本物の戦争の代理体験として、或る種のエネルギーの発散になっているのではないか」という意見もある。今のところ、この手の報道姿勢に対する疑問の声もあまり聞こえてこない。

しかし、このことは少なくとも次の2つの点で、問題をはらんでいるように感じられる。その1つは、各ニュース項目のいわば“額縁”に当たるキャスターの枠付けによって、ほとんどすべてのオリンピック・ニュースに対する視聴者の関心を強力にメダルに吸引しているからであり、もう1つには、スポーツ・ニュース以外に多くの一般ニュースを含んでいるニュース番組の「キャスターが意見や感情を表明する」ということに対する視聴者の慣れを生みつつあるように思われるからである。

第一の点については、ニュースでセンセーショナリズムが許容されるか、という問題に置き換えることができる。オリンピックに限らず、大きなスポーツ・イベントは生もしくは録画で中継放送される。スポーツ中継では、「ゴール! ゴール! ゴオオオー

脚注

9. ピエール・ブルデュー, シリーズ 社会批判 『メディア批判』, 藤原書店, 2000年, 140-141ページ

ル！」と絶叫して連呼するようなサッカー中継や、試合の前にアイドル・グループの歌や踊りのパフォーマンスを繰り広げ、試合中にも応援席のアイドルたちの様子を頻繁にインサートするようなバレーボール中継が日常化している。古くはラジオ時代の「前畑頑張れ！」という事例もある。娯楽としてのスポーツ中継もニュースとしてのスポーツの結果も、同じテレビというメディアを通じて視聴者に送り届けられることから、スポーツ中継における時代の“常識”は、いつしかニュースにも入り込んでくる。ニュースの番組枠の方も長時間化してスポーツ・ニュースのコーナーが大きくなれば、スポーツ中継に似た扱いを行い易くなる。この点に関して、例えば、商業放送の国アメリカにおけるテレビの扱いと、世界的な公共放送のBBCを擁するイギリスにおけるテレビの扱いを比較したら、どんな違いがあるのかなどは、検証の必要があるところであろう。

第二の問題は、「事実」と「意見」の峻別という原則に関わるものである。

テレビニュースの歴史をたどってみると、テレビニュースの「中立公正」を保つためにさまざまな工夫が行われてきた。例えば、ニュースにはBGMを付けない、という暗黙のルールがある。まだ同録カメラの普及していなかった時代にはフィルム・ニュースにはBGMをつけるほかなかったが、やがてそのBGMにどんな曲を付けるかによって伝えられる事実の印象が大きく異なることから、ニュースにはBGMを付けないということがセオリーになってゆく。また、ニュースを伝えるアナウンサーやキャスター、現地からのリポーターなどが自分の意見を交えてはいけないということも、長い間、常識とされてきた。これは、今日でもハード・ニュースについてはおおむね守られている。政治報道であれ、経済報道であれ、異なる利害を有する人びとが視聴者の中にはいるからである。

問題はスポーツ・ニュースである。

分析の中でも指摘したように、「NHKニュース10」は一般ニュースとスポーツ・ニュースとでキャスターの身振り・表情から声の調子まで、大きく違っている。スポーツ・コーナーになったとたんに、そう言ってよければ、キャスターは公人から私人になる。一般ニュースでは利いていた「中立的立場を守る」という抑制が外れたような印象を受ける。プロ野球のニュースの場合、NHKではそこまではやっていないが、商業放送のキャスターの中には、番組中で自分がどこの球団のファンであることを表明しているケースが少なくない。そのことによってキャスターも“生身の人間”であることが示せるし、そのことによって“敵味方”を問わず親しみも湧き、試合結果に対するそのキャスターの反応で視聴者の興味を惹くこともできる。ひいては、視聴率の向上につながるだろうという計算からである。

このことが示しているように、ここには伝統的なジャーナリズムの原則と、視聴率を追求せざるを得ない多メディア・多チャンネル時代のテレビニュースの経営的要請とがぶつかり合っている。短時間枠のストレート・ニュースが長時間のニュース・ショーに改編されるということは、単に時間が長くなるというだけのことではない。そこには、従来なかったキャスター間のトークという要素がなければ長時間の番組の視聴率をもたせられないという事情が生まれることになり、実際、そういう角度からコンサルタントによって助言され、アメリカの放送局で広まっていったものである<sup>(10)</sup>。このようなテクニックが支配的になるにつれて、事実と意見の区別というような、ジャーナリズムにとって基本的な事柄が次第に浸食されてゆく。已むを得ないと言っはいけないのだろうが、このような傾向は商業主義的なメディアにとっては、少なくとも「自然な」ことである

#### 脚注

10. ロン・パワーズ『ニュース・ドクター ショービジネス化するTV報道』、サイマル出版会、1982年

ように思える。

もう一つ、サッチャー時代のBBCがフォークランド戦争に際して「イギリス軍」という言葉を使ったことで、「我が軍」と言えと要求したサッチャー首相と対立した話は有名である。このことは、事実と意見の区別という原則と結びついている。スポーツ・ニュースは一応別コーナーになっているとはいえ、同一のニュース番組の中に配置されている。そのスポーツ・ニュースに私的感情や体験の表現を認めるということは、ニュース番組全体に対する印象を変えることになりはしないのだろうか。あるいは、そこから、ニュース全体に対する感情表現の許容ということに結びつきはしないのだろうか。木下是雄が指摘しているように<sup>(11)</sup>、欧米では初等教育の段階から事実と意見の峻別ということが繰り返し教えられ、鍛えられて、それが職業としてのジャーナリズムまで連続している。そのような背景のない日本のテレビ・ニュースが、視聴率競争に勝ち抜いてゆくために感情や意見の表出に対して甘くなるということには、或る種の危険を感じないわけにはゆかない。

近年の動向としては、むしろ、テレビのニュースや番組、新聞記事などのメディア・テキストを「批判的に読み解く」視聴者、読者を育てるという、メディア・リテラシー教育の方向に向かっている。BBCの『編集ガイドライン<sup>(12)</sup>』などに記されているように、記者やキャスターは視聴者に判断材料だけを示し、それをどう判断するかについては視聴者に委ね、視聴者は自分で判断するというものである。このような動きや考え方の整合性をどう付けるかという問題も出て来るであろう。

視聴率競争が熾烈さを増す中で、テレビ・ニュースは、他方、インターネットのブログの挑戦を受けてもいる。ブログの伝える情報が一般に編集とチェックを受けているという保証がないのに対して、テレビのニュースは第一に「事実の確認」(「ウラを取る」)作業が行われ、第二に専門家の判断によって編集されているということが強みであると言われている<sup>(13)</sup>。しかし、キャスターによる意見や感情の表明が日常化すれば、テレビニュースはしだいにブログに近づくことになる。オリンピック報道に見られた日本選手応援の姿勢の表明というのは、一見、何でもない問題のように見えるかも知れないが、こういった方向からも、デジタル時代におけるメディア報道のあり方について、見直しを迫られているように感じられる。

(横山 滋 NHK放送文化研究所主任研究員)

脚注

11. 木下是雄『理科系の作文技術』(中公新書), 1981年, 101ページ以下

12. Editorial Guidelines-The BBC's Values and Standards, 2005, p. 25ff

<http://www.bbc.co.uk/editorialguidelines/>

13. 「国際シンポジウム グローバル放送の時代 ~多様化と多極化の中で~」, 『放送研究と調査』, 2005年9月号